第四章　日露協約案ニ關スル栗野公使ト小村外相

栗野公使ノ日露協約私案

伊藤侯ト日露協和速進ニ付テ意見ヲ同フスル栗野駐露公使ハ明治三十五年二月卽チ伊藤公ノ露都訪問後間モ無ク着任シタカ、其直前ニ日英同盟締結セラレ、露國武斷派ノ氣焰カ高マツタ爲、我國ハ徐ロニ同國ノ事態ヲ靜視シテ時期ノ到來ヲ待ツテ居タラ、右ノ氣焰モ漸次收マリ四月ニハ滿洲還附條約カ成立シタノテ、小村外相ハ露國ト話合ヲスル糸口ヲ開ク爲、同年七月之レニ關スル電訓ヲ栗野公使ニ發シタ。同公使ハ「ラムスドルフ」伯ト會見シ着任以來同伯カラ極東問題ニ就キ日本ト親密ナル協商ヲ整フルニ意アルコトヲ屢々聞知シタルノハ頗ル欣幸トスル所テ、自分ハ極東永遠ノ平和ヲ維持スル爲ニハ日露兩國間ニ滿足ナ協和ヲ爲スヲ最モ必要ト信スル一人タカラ、此際胸襟ヲ披テ熟談研究シ度イト話合ノ端ヲ開ヒタラ、露國外相モ亦之レニ同意シ、前年伊藤侯ノ爲シタ提案ト之レニ對スル自分ノ返事トヲ差當リ研究ノ基礎トシテハ如何ト述ヘタノテ、栗野公使ハ右返事中韓國ニ助言ヲ與フルニハ豫メ露國ト相談ノ上トアルモ斯クテハ從前ト同樣ニ歸シ永ク双方ノ關係ヲ良好ナラシムル所以テ無イカラ、韓國ハ全然日本ニ放任サレタク、又露國ト接壤セル淸國ノ領土ニ關スル規定ハ餘リニ大綱ノミニ止マツテ居ル爲、却テ將來誤解紛議ノ基ト成ル虞カアルカラ、詳細ノ取極メヲ爲シ置ク必要カアルコトヲ注意シ、先方ノ希望ニ從ヒ其要點ヲ左ノ如キ覺書ニ認タメ純然タル私

案トシテ九月六日「ラムスドルフ」伯ニ手交シタ。

一、淸國及韓國ノ獨立並ニ兩國ノ領土保全ヲ互ニ保障スルコト。

二、韓國領土ノ如何ナル部分ヲモ軍事上又ハ策戰上ノ目的ニ使用セサル事ヲ互ニ保障スルコト。

三、露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越利益ヲ承認シ、韓國ノ事件ニ干涉セス又韓國ノ平和的利益ニ關スル日本ノ行動ニ干涉セサルコトヲ保障シ、殊ニ韓國ニ於テ行フヘキ日本ノ左記諸權利ヲ承認スルコト。

(イ) 商工業上ノ利益ヲ增進スル爲ノ行動ノ自由。

(ロ) 韓國ヲシテ善政府ノ義務ヲ遂行セシムル爲、同國ニ助言ヲ與ヘ又補助ヲ爲スコト。

(ハ) 韓國內ニ內亂又ハ騷擾起リ日本トノ平和的關係ヲ劫害スル場合ニハ、其目的達成セハ速カニ撤退セシムル諒解ニテ、必要數ノ軍隊ヲ韓國ニ派遣スルコト。

(ニ) 電信線及鐵道保護ノ爲、既定ノ守備兵及警察官ヲ維持スルコト。

四、日本ハ一八九八年同國政府ニ露國政府ヨリ通告セル旅順口及大連灣ノ租借並ニ滿洲ニ於ケル露國ノ權益保護ノ爲ニスル行動ノ自由ヲ明確ニ承認スルコト。

五、日露兩國間ニ現存スル韓國關係諸協約ハ終了シ其効力ヲ失フヘキコト。

此覺書ニ接シタ「ラムスドルフ」伯ハ之レヲ以テ大ニ偏重ノ嫌アリトテ苦笑シタトノコトタカ、同伯ハ其後露帝ニ扈從シ「クリミヤ」地方ニ旅行シタ爲此談判ハ暫ク頓挫シタ。尤モ栗野公使カ提出シタ前記ノ覺書ハ同公使自身「ラムスドルフ」伯ニ明確ニ陳述セル通リ、同公使カ勝手ニ作ツタ全クノ私案テ本省トノ打合セ

ハ少シモ無ク、伊藤侯ノ提案ヲ基礎トシテ作リ上ケタモノニ過キヌ。

小村外相ノ意見ト外務省案

小村外相ハ斯ク速急ニ日本側カラ原案ヲ提出シテ具體的ノ交渉ニ入ル積リハ少シモ無カツタノデアルカ、既ニ先方ニ提出濟ノ事故右覺書ニ對スル批評ト、外務省作成ノ提案トヲ同公使ニ送附シタ、卽チ左ノ通リデアル。

栗野公使作成提出ノ覺書ニ關シ

一、清韓兩國ノ獨立後領土保全ヲ互ニ保障スル事ハ、右兩國ヲ日露ノ共同保護ノ下ニ置キ、殊ニ韓國擁護ノ責任ヲ露國ニ分ツコトト成ルニ付、保障ノ代リニ承認ナル文字ヲ使用スルコト。又清韓兩國ニ於ケル各國商工業機會均等ノ原則ヲモ併セ承認セシムルコト。

二、本項ノ如ク我自由行動ヲ束縛スルノ規定ハ、成ルヘク之レヲ避ケ度ク、我ヨリ進ンテ提議スヘキモノニ非サルコト。

三、伊藤侯ノ提案ニハ韓國ニ於ケル政治上、商業上及工業上ノ事項ニ關シ我國ノ自由行動權ヲ認ムルコト記載シアルニ拘ラス、今回ノ覺書(イ)ニ政治上ナル文字ノ記入ナキハ我自由行動ノ範圍ヲ進ンテ狹隘ナラシムルニ外ナラサルコト。

四、本項ハ最モ愼重ナル考慮ヲ要スヘキ事項ナル所、伊藤侯ノ提案中ニハ全ク之レナキ個條ニシテ、本項

ノ如クンハ滿洲ニ於ケル露國ノ自由行動權ヲ認ムル範圍極メテ廣汎ニシテ、露國ハ殆ント何事ヲモ爲シ得サル所ナク、從ツテ第一項ノ主義トモ自ラ抵觸スルノ嫌アリ、且ツ露國ノ權利ハ爾ク絕對的ナルニ反シ、我國カ韓國ニ於テ有スヘキ權利ニハ種々ノ制限アリテ、兩者均衡ヲ得サルコト。

外務省作成ノ協約基礎案

一、清韓兩國ノ獨立、領土保全及各國商工企業機會均等主義ノ維持ヲ重ネテ言明シ置クコト。

以上ノ主義ハ日英協約ニ依リテ宣明セラレ、露佛宣言ニ依リテ確認セラレタルモノ故、日露協商ニテ重ネテ之レヲ言明セハ、首尾一貫シテ益々確實ト成ルヘク、露國亦之レヲ否ムノ辭柄ナキヲ信ス。

二、日露兩國ハ互ニ韓國又ハ滿洲ニ於テ其現ニ有スル利益ヲ認メ、且ツ之レカ保護上必要ノ處置ヲ執リ得ルコト。

我國ハ韓國ニ於テ最モ多數ノ居留民ヲ有シ、同國ノ通商、航海、漁業、鐵道、銀行其他各般ノ商工業ニ關シ殆ント專占ノ利益ヲ有シ、加フルニ同國ニ於テ最モ整備セル電信、郵便等ノ通信機關亦我手中ニ在リ、要スルニ同國ニ於ケル帝國ノ利益ハ各種ノ方面ニ於テ絕對的ニ優勝ノ地位ヲ占ム、然ルニ露國カ滿洲ニ於テ現ニ有スル利益ハ專ラ鐵道ニ關ス、故ニ日露兩國政府ハ互ニ上記現存ノ利益ヲ確認シ、且ツ之レカ保護ノ爲ニハ前項ノ主義ニ抵觸セサル範圍內ニ於テ必要ノ手段ヲ執ルコトヲ認メサル可ラス、此取極メハ一見不權衡ナルカ如キモ、韓國ニ於ケル我商工業上ノ優越利益ハ既ニ明治三十一年四月ノ日露議定書ニテ露國ノ認ムル所ナリ。

三、日露兩國ハ上記ノ利益ヲ保護スル爲必要ナルカ又ハ地方ノ騷亂ニ依リ國際的紛擾ヲ惹起スヘキ虞アル時ハ、之レカ鎮壓ノ爲出兵ノ權アルヲ認ムルコト。

卽チ右ノ場合ニ於テハ、日本ハ韓國ニ、露國ハ滿洲ニ、出兵スルコトヲ得、尤モ出兵ノ目的カ達セラレタル時ハ、直チニ之レヲ撤セサルヘカラサルコト第一項ノ主義保持上當然ノ事ナリ。

四、日本ハ韓國內政改革ノ爲助言及助力（軍事上ノ助力ヲモ含ム）ノ專權ヲ有スルコトヲ露國ニ於テ認ムルコト。

我國ハ前述ノ如ク韓國ニ於テ絕大無比ナル利益ヲ有ス、然ルニ同國ノ內政ヲ見ルニ積弊山ノ如ク、國家ハ正ニ破產ノ境ニ沈淪シ綱紀上ニ亂レ蒼生塗炭ニ苦シミ、何時民亂ノ發生スルヤモ計ラレサル有樣ニテ、爲メニ我國ノ利益ハ間斷ナク脅迫ヲ受ケツツアルノミナラス、極東平和ノ禍源亦實ニ玆ニ伏在ス、故ニ韓國內政ノ改革ヲ圖ルハ刻下ノ急務ニ屬シ、而シテ助言及助力ノ權ヲ二國若クハ二國以上ニ賦與スレハ、何レノ場合ニ於テモ常ニ失敗ニ終ルコト歷史ノ明示スル所ナルニ付、韓國ニ對スル上記ノ權益ハ同國ニ於テ絕對的優勝ノ利益ヲ有スル我國ニ專屬セサル可ラス。

然ラハ露國ニモ亦滿洲ニ關シ同一ノ權利ヲ與フヘキヤト云フニ、帝國政府ハ之ニ同意スルヲ得ス、何ントナレハ曩ニ滿洲問題ノ騷然タルニ際シ、帝國政府ハ英米等ト共ニ淸國ノ主權並ニ列國カ淸國ニ對シテ有スル條約上ノ權利ヲ毫末ニテモ毀損シ、政治上タルト通商上タルトヲ問ハス他ノ一國ニ向ツテ何等專權ヲ與フル底ノ條約ニハ、全然同意スルコト能ハストノ主張ヲ固執シ來リタレハナリ、況ンヤ

露國ハ既ニ滿洲ニ於テ旅順及大連ナル一好軍港ト一大商港トヲ有スルモ、我國ハ韓國ニ於テ一モ之レヲ有スルコトナク、兩者ノ地位ハ現時ニ於テ既ニ其平衡ヲ失セリ、故ニ若シ露國ヲシテ滿洲ノ內政改革ニ付我國ノ韓國ニ對スルト同一ノ權利ヲ得セシメンニハ、兩者ノ地位ハ終ニ平衡ヲ得ルコトナカルヘク、從ツテ上記ノ區別ヲ設クルハ卽チ之レヲ平衡均一ナラシムル所以ナリ。

五、韓國縱貫鐵道ト東淸鐵道及牛莊鐵道トノ連絡ニ關シ、露國ハ少クモ妨碍ヲ與ヘサルヘキコト。

韓國縱貫鐵道中釜山京城間ハ我邦人ノ手ニ依リ、京城義州間ハ韓國政府ノ手ニ依リ敷設セラレツツアリ、然レトモ其終端ニシテ義州ニ止マランカ、之レ單ニ地方鐵道タルニ過キスシテ其効益甚大ナラス、故ニ結局ハ之レヲ延長シテ東淸鐵道及牛莊鐵道ニ連接シ以テ大陸幹線鐵道ノ一部ヲ形成セシメサル可ラス、然レトモ若シ露國ニ於テ之レヲ諾セスンハ復奈何トモスル能ハサルヲ以テ、少クトモ本計畫ヲ妨碍セサルヘシトノ保障ヲ得置クコト極メテ緊要ナリ、又露國ノ爲ニ謀ルモ韓國鐵道ト東淸鐵道トノ連絡ハ、日露間ノ交通否ナ世界ノ交通ヲ大ニ敏活ナラシメ、通商上ニ於テ露國ノ得ル處極メテ大ナルヘシ。

本案ノ骨髓トモ云フヘキハ第四項ニテ、右ハ伊藤侯提案ノ第一條ト合致スルモノナリ。

栗野公使ハ右ニ對シテ意見ヲ具陳シ、併セテ質疑シタラ、小村外相カラ更ニ左ノ回訓カアツタ。

第三項ニ付テハ伊藤侯ノ提案ハ政治上ノ自由行動權ト助言助力ノ專權トヲ併セ含ミ、且前者ハ後者ニ比シ一層其範圍廣濶ナル故成ルヘク兩者ヲ併有シ度シト考フルモ、右ハ從來ノ成行ニ徵シ到底露國ノ同意ヲ得

ル望ナキニ於テハ、貴見通リ助言助力ノ專權ヲ得ルヲ以テ滿足スヘシ。

第四項ノ本旨ハ滿洲ニ於ケル露國現有ノ鐵道ニ屬スル權利利益ヲ保護スル爲、其行動ノ自由ヲ認ムルニ過キサル趣ナルニ於テハ敢テ異存ナキモ、然ラハ鐵道ナル文字ヲ挿入シテ此趣旨ヲ明瞭ナラシメ置キタシ。要スルニ我提案通リ露國ヲシテ承認セシムルハ至難ノ業ナルヘク妥協ノ爲ニハ双方共讓歩ノ決心アルヲ要スヘシ、但シ本省提案　一、三、四、ノ二大原則ニ付テハ毫モ讓歩ノ餘地ナキモノトス。

「ラムスドルフ」伯ハ「クリミヤ」ニ出發當時栗野公使ニ對シ、明治三十五年十二月末歸還ノ上本件ノ意見交換ヲ繼續シ、「ローゼン」公使ノ東京ニ出發前問題ヲ落着サセルコトカ出來、同男カ此結果ヲ携ヘテ赴任スル樣ニナレハ仕合セタト語ツタトノコトテ、前記訓令モ其爲ニ發セラレタノテアルカ、「ラムスドルフ」伯ハ歸還後少シモ開談ノ模樣ナク、其内「ローゼン」公使ハ出發シタ。

其ノ成行

伯ト談話ノ印象其他ニ基ク栗野公使ノ觀察ニ依レハ、露國政府ハ日本ノ現内閣カ露國ト接近スルノ眞意ナク、議會ノ態度ヨリ推シテ遠カラス桂内閣ハ倒レ、伊藤内閣カ成立スルノヲ豫見シ、又栗野公使ノ意見ハ現内閣ノ政策ト一致シテ居ラヌヲ疑ヒ、談判繼續ヲ躊躇シテ居ルノタラウトノコトテアル。何レニセヨ先方ニ開談ノ意思カナイ樣ニ思ハレタカラ、栗野公使ハ明治三十六年四月二日「ラムスドルフ」伯ニ會見ノ際同伯ニ向ヒ、昨年其希望ニ基キ自分一個ノ見地テ起草シタ私案ヲ差出シテ置イタカ本日伯ノ語氣カラ察スルニ、

伯ハ目下本件ノ話合ヲ繼續スル意思カ無イ樣ニ見受ケラレルニ就テハ、曩ノ私案ハ伯ト自分トノ間ノ話合ノ基礎トスル目的テ提出シタモノタカラ、一應之レヲ返シテ貰ヒタイト申入レ、斯クシテ第一回ノ開談ハ打切ラレ、從ツテ前記ノ訓令ニ掲クル協定基礎案ハ露國ニ提出セラレスニ終ツタ。伊藤侯ノ提案ト之レニ對スル露國ノ對案、栗野公使ノ私案乃至外務省案ハ斯クノ如クシテ廢物トナツテ仕舞ツタカ、是等ノ諸案ハ當時ノ氣分ヲ知ル材料ト成リ得ルノミナラス、爾後ノ日露折衝ノ經緯、淵源ヲ了解スル爲甚タ貴重有益ナ資料テアルカラ、比較的詳細ニ之レヲ記述シタノテアル。